

## 武蔵野日曜集会

## 十字架と復活

――ヨハネ伝第20章11～18節――

1985年3月31日

小池辰雄

マグダラのマリヤ 非常に惨めな姿 D1 「春のいのち」 我々は矛盾構造 「内村鑑三の生涯」  
呼ばれた瞬間にパラダイス

## 【ヨハネ20・11～18】

11 然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて、墓の内を見るに、<sup>12</sup> イエスの屍体<sup>しかばね</sup>の置かれし処に白き衣をきたる二人の御使、首<sup>こゝろ</sup>の方にひとり足の方にひとり坐しいたり。<sup>13</sup> 而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰か、わが主を取去れり、何処に置きしか我しらず』<sup>14</sup> かく言いて後に振反れば、イエスの立ち居給うを見る、然れどイエスたるを知らず。<sup>15</sup> イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守<sup>そのもり</sup>ならんと思ひて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』<sup>16</sup> イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤ振反りて『ラボニ』（釈けば師よ）と言う。<sup>17</sup> イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」と言え』<sup>18</sup> マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々<sup>しかじか</sup>の事を言い給いしと告げたり。

## ●マグダラのマリヤ

「マグダラ」というのはガリラヤ湖の西の方の寒村です。「マグダラのマリヤ」は「マグダレーナ」とも言います。ロダンが非常に大胆な彫刻をしましたね、十字架のキリストに裸のマリヤがしがみついているような。さすがはロダンらしい彫刻ですが。

## 「七つの悪鬼につかれた」

という。悪鬼につかれる人は、女性でも男性でも、非常に霊的なんです。霊的であると同時に非常にまた情熱家である。霊的でしかも情熱的な女性であった。「ある女」とか「罪ある女」とか「ベタニヤのマリヤ」とか、いろいろあつてゴタゴタする。私はあの「ナルドの香油」でだいぶ書きました。「マグダラのマリヤ」というのは、しかし、キリストに非常



に惹かれていた。またキリストも非常に顧みた女性のひとりです。

悪霊というものは、またキリストを非常によく見るわけです。マルコ伝5章でも悪鬼につかれたやつが一番先に神の子であることを発見した。ペテロよりか先に。ただ、キリストの霊には責められますから、こわがるわけです。そういう、霊的でも情熱的な女性がこの「マグダラのマリヤ」です。復活のキリストに――これは福音書はどれもそうです――一番先にでつくわしているのがマグダラのマリヤです。

## 20章2節の、

### 「イエスの愛したもう弟子」

というのはもちろんヨハネです。ヨハネの方は、これも深い霊的な使徒です。外側には出てこない。非常に深い人です。パウロの方は鋭い。パウロの方は鋭くてヨハネの方は深い、と言った方がいいかもしれませんが。それで特に黙示録で黙示にあずかったのがこのヨハネですから。ペテロは、ある意味において非常に波のある使徒です。これは福音書でよくわかるとおりです。聖霊を受けたペテロはまたガラリ変わりますけれども。キリストにでつわすと、それぞれの特色がまたはつきりと出てくるわけです。

「キリストは失われた、死んだ」

と、こう思った。

特に使徒たちはそのことは一番聞かされているんだけど、これに躓いているし、マグダラのマリヤもやはりそうだ。どの程度彼女は聞かされているかははつきりしませんが、れども。本当に復活を信じたのは、その意味では一人もいなかった。それくらいキリストの復活というのは――「復活」という言葉が大体躓きになりますけれども――ただ息を吹き返したのではなくて、本当に霊体として新しく現れ方をした。キリストは地上に現れる前から神と共にあった。そして、地上にはつきりと現れて、そしてまた天界に行った。永遠の存在です。

### ●非常に惨めな姿

地上に現れた姿は何といってもイザヤ書53章です。ちよつと開いてください。ひとつも神の子らしくない。非常に惨めな現れ方をする。これはキリストへの預言です。

「<sup>2</sup>かれは主のまゑに芽えのごとく、<sup>3</sup>燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艷色なし。<sup>4</sup>かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人に<sup>5</sup>て病患をしれり。また面をおおいて<sup>6</sup>避ることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとつとまざりき。

と。これは非常に惨めな姿です。キリストは必ずしも惨めではなかったらしい。けれども、そのキリストの内的な姿はイザヤ書53章なんです。躓きなんです。



5 彼はわれらの愆<sup>とが</sup>のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、私が「砕けの神学」と言ったのはこの砕けです。

みずから懲罰<sup>こらしめ</sup>をうけてわれらに平安<sup>やすき</sup>をあとう。そのうたれし痕<sup>きず</sup>によりてわれらは癒<sup>なを</sup>されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまへり。即ち、燔祭<sup>こひつじ</sup>の羔<sup>き</sup>ということ。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙<sup>へりく</sup>だりて口をひらかず、屠場<sup>ほふりば</sup>にひかるる羔羊<sup>こひつじ</sup>の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。」  
(イザヤ53・2～7)

こういう姿は、キリストは捕まってからそのとおり表わされた。イザヤ書53章の預言を身をもつて体现された。侮られ、棄てられ、唾され、十字架を負わされた。惨憺たるものです。

神の真理は非常に大矛盾であり、大逆説なんです。決して前進的でない。また論理的でない。人間の理性の判断、単なる感情の判断をぶち破るもの。だから、聖書はなかなかこれがかめない。

真理はそういう矛盾逆説なんです。「神の子」なんて言っただって、地上に現れたときにはおよそいわる神の子らしくない。だからむしろ、ユダヤ教に対しては非常な反逆者と思われる。ユダヤ教に対しても完全に逆説なんだ。ユダヤ教とは矛盾する。祭司や教法師やみんなに、

「あれはやつつけてしまえ」

と言われる。群衆は始めは、いろんな病を治されたりするものだから、いい気になってついてきたけれども、最後にはやつぱり背いてしまった。ペテロ・ヨハネ・ヤコブの三人の弟子たちも結局は、これだけの先生につきながら、やつぱり見えてない。見えども見えず聞けども聞こえずだ。それくらいキリストの福音というのは、新たに生まれなければ、聞けないんです。イザヤ書にもあるように、

「聞けども聞こえず、見えども見えず」

ということなんだ。いわゆる聞こうとしたり、見ようとしたって、これはダメだ。福音というのは全身でもつてぶつかって、ぶっ倒れるまではダメなんだ。だから、

「聖書研究会で聖書がいくら頭で分かったってダメですよ」

と私は言っている。聖書というドラマの中に自分を投げ入れて、ぶっ倒れて、「参りました!」

と言ったら、その世界に入れる。降参するまでは入れない。そういう完全に逆説だ。いわゆる「分かる」ではない。降参しなければダメなんだ。

これがイザヤ書53章に預言されているところのキリストの姿です。それから、イザヤ書



35章に預言されているところの天国をそのまま現れて行った。

「盲者は見、跛者は立ち、癩病は癒され、死人は甦える。我に躓かない者は幸いだ」

と、洗礼のヨハネにまで言つたでしょ。洗礼のヨハネも、

「どうなんだろうな？」

なんて、ちよつと疑つたから、洗礼のヨハネにそう言つてやれとキリストは言われた。

非常に惨めな姿をしているけれども、その中身はもの凄い。中身はもう天上の中身なんだ。霊界の中身だ。キリスト自身が矛盾の姿をしている。地的な姿をしながら、霊的な霊界の中身を持っている。天地融合している姿を本当は持っている。だから、いい加減なことで、

「二人の聖人だ」

なんて、孔子なんかとはケタがちがう。孔子、孟子、老子、何が出てきたって、キリストにはかなわん。次元がちがう。これは絶対次元だ。孔子の教えを私たちは小さいときからずっと教わってきたけれども、誰が孔子によつて救われたか。誰も救われはしない。人間を救うということは、全存在を新しく生まれ変わらせる、という、これはキリストのほかにできない。まあお釈迦さんが似たことはしますけれども、ちよつとまた次元がちがう。何と言つたって、お釈迦さんの世界は悟りの世界だからね。もの凄い生命の世界はこのキリストの世界だ。

## ●D1「春のいのち」

ところで、私はまた不思議なことに、こういう歌が自然にできてしまった。これは私が歌を作つて作曲した第一号です。

D1「春のいのち」(1985年2月26日 作曲小池辰雄)

1 雪わり草が 山に萌え

小桜草が 野に笑ひ

乳房にすぎる 羔の

すがたは春の いのちかな

2 池の真中に泉湧き

緋鯉真鯉の 往き交へば

歌ひて躍る 若人の

すがたは春の いのちかな

3 宵闇迫る 西空に

かがやき出でぬ 星一つ

神話伝説 ゆたかなる

すがたは愛の 神秘かな



こういう春らしい歌ができてしまった。そういう春の甦りよりもっと凄いのはキリストの甦りなんだ。これが霊的な甦りと、それから自然的な甦りの融合ということ。

甦りというのは、新しい霊生なんです。霊の生命。我々がキリストの復活を――お祭と言ったって――自分の中に霊生を賜らなければ、本当のお祭にならない。霊生を賜るためには、ヨハネ伝の後半の方にいくと、

### 「聖霊を受けろ」

ということを経キリストが言っておられる。だから、「十字架・復活（霊生）・聖霊」がもう既にヨハネ伝19章、20章でこの全体が出ているわけです。

### ●我々は矛盾構造

もちろん、キリストはいきなり天界に行けたわけです。肉体が霊化してしまって、いきなり天界に行けたのを、十字架を通らなければならなかったのは、これは贖罪のためです。我々の我執を全部処分した。私の現在も過去も未来も、あなた方の現在も過去も未来も、全部その罪びとという相対的な事実、それを根底から贖いとったんです。

これも矛盾逆説ですよ。我々は矛盾構造なんだ。死に至るまで罪びとです。死に至るまで罪びとでありながら、同時にキリストから贖われたところの義人である。これはルターも言っているとおりの。義人であるということと罪びとであるということが同じに重なっている。「義人」というのは、

### 「キリストの義をいただいた者」

ということですよ。我々が義しくなったのではない。神さまの御意に完全に従って行じたその姿が義というんですから。これはキリストのほかにはない。

### 「それをみんなお前にやる」

というのが、このキリストの十字架であると同時に復活の生命です。

十字架と復活、これもまた離すことができない。十字架と聖霊も離すことができない。これは三、相一、貫というわけです。三、相一、如でもいい。これは絶対に離せない。この離せないことは、最後の聖霊が来ないと、本当の意味では展開しない。最後の聖霊を受けないと。だから、クリスマスもこの復活節も聖霊降臨節も実はみんな一つなんだ。

イザヤ書53章を身でもって現じて、私たちを完全に贖いとってくださいったという、この十字架の贖いです。「ああ、そうですか」と言って、ただ命題を信じたってダメなんだ。その程度が多い。贖罪という命題を信じて、ただ心安めになっている。

### 「われキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言ったガラテヤ書2章20節が本当に自分のものになっているかというわけです。

### 「もはや、われ生くるにあらず」

という。生きているではないですか。ところが、根底では「生きていない」ということが



はつきり言えるんです。根底では自分がない。無我だ。我なんかないと。これは我執の我です。無我と無罪、罪のないのとは同じこと。無我無執の世界。自己に執したことが全部なくなっている一番根底の現実を賜っている。根源現実は無であるんです。自分にとらわれていない世界です。そこには聖霊が来る。それでなければ、聖霊は来ないんです。

だから、十字架を本当に受けとったら、ガーツと聖霊がやって来る。これは本当にそうです。自分で祈ってごらん。キリストの中に祈り入るんですよ。十字架のキリストの中に祈り入ってごらん。今度は、復活のキリストの中に自分が入られるから、凄い力が来る。甦る。その事態はもう聖霊の事態なんです。その生命は、復活の生命は聖霊の生命だからね。パウロが言った、

「キリストわがうちに在りて生き給うなり」

とはそのことなんだ。

だからもう、何がどうなったっていいじゃないですか。いろんなことにでつくわせばでつくわすほど逆に力がくるというのが、これがまたさつきから言っている逆説なんです。本当にそうです。

「この頃は天気が悪くて、どうも体の調子が悪い」

「入学試験がうまくいかなかった」

だのと、どうだつていいんだよ。その奥でキリストを受けとってごらん。ガーツものの凄いい燃焼をしてしまつて、

「風邪をひいていたと思つたのがどこかへ行つてしまつた」

なんていうことになる。調子が悪かつたら私の集会に来なければダメだ。

「今日は調子が悪いから、集会に行きません」

なんて、なおさら調子が悪くなるよ(笑)。本当ですよ、これ。日曜毎に、なぜ、私たちはこのようにしてやっているかという、絶えず前進してやまないためにやっているんです。私は楽でしょうがない。日曜の集会をすると、普通の牧師さんや無教会の先生方も、

「くたびれてしまつて、もぬけのからみたいだ」

なんて言う。冗談言うなど。逆に上から力がきて、私はもう充満してしょうがない。溢れてしょうがない。泉のごとく。そうでしょ。これはキリストの生命が上からやつてくるから。

## ●「内村鑑三の生涯」

ところで、私が作つた内村鑑三の詩の一部を紹介します。これは讃美歌の「さまよう人々」の譜で歌える。

「内村鑑三の生涯」(召天五十五周年記念) 天震 1985年3月28日)

51 聖書の講義は 今井館よ

秀れたる学徒 道を求む



内村慕いて ドイツからは

若きグンデルト 隣人ぞ

52 男体女峰の 山の裾野

戦場ヶ原にて 語らひける

「われは罪びとの 首なれば

万人救済 必定なり」

これは有名なお話ですね。「罪びとの首の私が救われたんだから誰でも救われる」と内村先生は告白しているわけです。

その次は、高橋ツサ子さんという東北の花巻にいる女性が家出てきて、内村先生を慕って、先生の所で女中になる。信仰もあついいし、非常に本も読むし、けれどもとうとう病気に罹って、ついにたおれてしまう。故里に帰ってから仆れてしまった。

53 高橋ツサ子は 家出をなし

内村を慕い 良くかしづく

信仰もあつく 学を好む

されど病を得 遂に召さる

54 彼女の故里 花巻にて

葬儀に当りて 噫内村は

言葉途絶えて 十五分間

落涙するのみ 空前絶後

この告別式でこの女性のためにただ涙を流して、15分間途絶えた。こんなことは、内村先生は前にも後にもないという話だ。そのときにもう内村先生のお嬢さんは既に病氣だった。

55 愛娘ルツ子 ときに病みて

高熱半歳 明治の終末

睦月十二日 氣息絶えて

半時間を経て 「もう行きます」

明治44年1月12日、息がたえて40分たつて、そして突然、「もう行きます」と言つたそうだが、天界にいった。素晴らしいひとだ。そうすると今度は、内村先生はこの告別式のときに、

56 聖国を慕ひて 旅に立ちし

彼女を偲びて 父内村

「今日は娘の 天国への

嫁入りの式よ ルツ子万歳」

「葬式じゃない。これは結婚式だ」

と、内村先生はそう言つたんです。そして、内村先生は、百合の模様があつて、「また逢う日まで」と書いた。そして、内村先生はこのルツ子さんが亡くなつてから、この復活の



信仰がはつきりした。唯一神から、十字架をシーリー先生で受けとって、ルツ子さんで復活に来て、それから今度は、第一次戦争でもう世界は、キリスト教国は望みがない。早くキリストが再臨しなければ困ると。そこで再臨運動をおつ始めて、再臨の信仰が燃えた。ところが、たった一つ足りないのが、この聖霊のことなんです。この聖霊のことのはつきりした――もちろん、先生はいろんなことを言ってらっしゃいますけれども――その告白が残念ながら欠けている。ここに無教会の限界がある。

我々がこの聖霊の画竜点睛をしなければならぬ使命をおびている。内村鑑三、藤井武、それから小池辰雄と、こう来ているわけなんです。手島君もそうだけれども。御霊の力、御霊のことが、普通の讃美歌をみると、滅多に歌われていない。どういふんですか、これは。

### 「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

とパウロがはつきり言っている。私は阿蘇でもってひっくり返ってからだ。そうしたら、聖書がガラリ読めるようになった。聖書のベールがとれてしまつて、こんなに聖霊のことが書いてあるかと驚いた。みんな、体裁じゃないよ、信仰は。本当にそうです。だから、特別集会で幾人ものひとがみんなひっくり返つたでしょ。大体、召団の方々はそうだよ。春・夏・秋の特別集会でひっくり返つた人がおおかたでしょうが。

57 彼女をみ国へ 送りしのち

復活の信仰 彼にめざめ

新たなる力 胸に湧きて

歓喜と希望の 歌となりぬ

58 世界の大戦 勃発せり

キリスト教国 あてにならず

人類の罪は 終末時まで

戦また戦 果つるなからん

59 キリストの再臨 待ち望まん

再臨運動 とみに起こり

内村さきがけ 陣頭に

烈しく獅子吼す 審判の日を

60 再臨運動 東西へ

東京、大阪、 京都、神戸

半歳あまりは 火の内村

世界は何処へ 往かんとする

61 都の中央 大手町に

聖日講演 うち開けば

五六百名の 聴講者



内村全盛

時代なりし

62 噫誰か測らん

大震災

全都の大半

火に包まれ

流言蜚語飛び

此処彼処に

鮮人虐殺

数千名

朝鮮人が悪いことをしたと言つて、朝鮮人を虐殺した。その蜚語をもらしたのは警視庁ですよ。とんでもない話なんだ。あの頃の警視庁だの、それから後の第二次戦争の陸軍の憲兵なんてものはしょうがないね。

それで、先生は3月23日に亡くなる少し前に、70歳だよ、内村先生は。

65 噫古稀を迎へ

叫びて言つ

福音万歳！

更に叫ぶ

日本国万歳！

時に弥生

二十三日ぞ

あな奇すしや

66 床に坐して

「宇宙万物

人生みな可し

言外無量

人類の幸と

祖国の隆盛

宇宙の完成

切に祈る」

これは私の詩ですから、こういう表現になっていきますけれども、大体同じ言葉です。

67 内村鑑三

まことの人間

まことの預言者

詩人なる哉

矛盾にみつれど

いつはりなし

劇的性格

生涯然り

生涯もまた劇的であつた。非常にドラマチックですね。内村先生は、昨日言ったことと今日言ったことがまるで反対のことを言う。そうすると、

「先生はわけが分からない」

なんて。そうじゃないんですよ。昨日言ったことはその瞬間において本当なんです。今日言っていることはまた今日言っている瞬間において本当なんです。そういう、どちらも本当。それを時間やその場合をぬきにして観念的に並べたって、それはダメです。本当の人というものはそういった矛盾を持っている。矛盾のための矛盾ではないですよ、なにも。

「いつわりがない」

ということは非常に大事なことです。自己をそのままそこに投げ出すこと。体裁を作らない。頭で考えて、それから辻褄を合わせてから、ものを言うのではない。そういう人物です。第一級の人物は大体そうだね。ダンテにしろゲーテにしろ。その瞬間に対して、博打うちが体でもって博打を打つように、瞬間に対して自分の生命を賭けるというようなことは、



ゲテは「エッカーマンとの対話」の中でも言っている。一日一生、瞬間における永遠というわけです。

内村先生が、

「二つのJを愛する」

と言った。ジーザスとジャパン。これはみんな一つだと思っている。本当は一つなんだ。なぜですか。

「神を愛することと隣人を愛することとは一つだ」

とキリストは言われたではないですか。だから、キリストを愛することと、隣人即ち、日本を愛することとは一つなんだ。なにも二つではない。「二つのJ」ではない。そこまで内村先生ははっきり言わなかったけれども。

「これは本当は一つだよ」

とどこかで言ってくればよかった。

47 二つJあり 内村には

JESUSとJAPAN これを愛す

「キリストのために 祖国のため」

我は在るなりと 彼は叫ぶ

48 二にして一なり 二つのJは

神と隣人の アナロギアぞ

義と愛に燃えて 日本のため

彼は生涯を 貫きたり

49 内村の道は 武士の道に

接木となりたる キリスト教

地方伝道を 展開して

やまざる月日 開始されぬ

云々と。これはちよつと前に戻ってしまった。最後はこういうことです。

68 彼は信ぜり 唯一の神

十字架のイエス 復活の主を

再臨の主を 生命賭けて

すべては体験 いつはりなし

69 内村鑑三 明治・大正・

昭和に亘りて 日本国の

真理の戦士ぞ 比類もなき

噫世界的なる たましひなり

70 「吾は祖国のため 祖国は何ぞ



世界のためなり 世界は何ぞ

キリストのためぞさすべては

御神みかみのためなり」永遠とこはの墓碑銘

「アイ・フォア・ジャパン」のあの有名な言葉です。とにかく大きな魂です。我々は内村先生のその気合を、聖霊があるから後が継げるんです。藤井先生のあとも私たちが継げる。いわゆる無教会のご連中は継げない。学問の方にズレ過ぎてしまった。あなた方はみんな、そういう意味で、本当の無教会の本流はここにありということ。もう「無教会」の「無」もいらない。教会も無教会もそんな相対的なことは乗り越えている。宗派根性なんかないから。カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、何だっていい。そこに本ものがありさえすればいい。クリスチャンでなくたっていい。いつわりなき人とは楽にお話ができる。こういうことです。

旧約聖書にも時々、

「いつわりがない」

という言葉があるが、私はあれは非常に大事な言葉だと思っている。いわゆる罪はいろいろ犯すよ。けれども、「いつわりがない」ということは、

「俺はダメだ、もう傲慢なやつだ」

と、そのいつわりないところをはつきりと告白していくと、神さまはつかまえて、どしどし変えていく。

そのいつわりなき人で素晴らしかったのは、内村先生の好きだったベートーベンなんだ。ベートーベンと似ているよ、魂が。(ベートーベンの歌「視よ此の人ぞ!」の独唱あり。省略)

ベートーベン自身の言葉の中にも、

「自分は最高の意志に自分の身を委ねる」

という言葉がある。即ち、運命に対してそれをもって戦うという。神さまの意志に従ってね。大体、超一流の人はみんな絶対界との魂の交わりがあります。内村先生が、

「なぜ、日本に偉大な詩が生まれぬか」

と言うのは結局それです。内村先生の言葉の中に

「偉大な詩が生まれない。大詩人が出でよ」

という言葉があるんだよ。私は内村先生に應えるから。これから12年かかって大きな詩をひとつ書きますから。絶対に書きます。もうかなり進んでいます。もう500行近く書いてある。私は夜型だから、10時頃からもの凄く光ってくる。夜が暗くなると、霊的な光が現れてくる。

●呼ばれた瞬間にパラダイス

それで、また元へ戻ります。ヨハネ伝20章。

15 イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守そのもりなら



んと思いて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』<sup>16</sup> イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤ振反りて『ラボニ』

(釈けば師よ) と言う。

「なぜ、泣いているか」

と。「泣いているか」と言いながら、キリストはやはり、復活のキリストも、それは本当に同情して泣いているんだよな。けれども、その涙は本当は喜びに変える。

「私は死んだのではないよ」

ということを、このただ一言、

「マリヤよ!」

というこの一言。今まで親しく呼んでいました。その同じ響きを聞いて、このマグダラのマリヤはハッとすぐそこで、

「先生! (ラボニ!)」

と言ったわけだ。私たちは、あなた方一人が、お名前を呼ばれているわけだ。「マリヤ」ばかりではない。キリストは万人に一人ひとりに100%に呼びかけます。あなた方はみんなキリストの恋人だからね。女性ばかりでなくて男も。我々は名前を呼ばれているわけです。いつ、どういうときに、その名前が聞けるんですか。うまくいつているときでも、まずくいつているときでも、相対的な波のうひとつ奥の世界。自分が本当にぶつつぶれて平伏しているとき。十字架のキリストの横の片一方の盗賊は、

「せめても憶えてください。私はさんざん悪いことをしました」

と。もう片一方は、

「お前は神の子なら俺たちも救ったらよろう」

なんて。こっちはダメ、これは呼ばれない。碎けた平伏しのぶつつぶれの、この魂にはキリストは呼びかける。

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。今日という日に、今という時に。いずこにおいても今という時、今日という日がパラダイスなんです、キリストに呼ばれると。呼ばれた瞬間に、その声を聞いた瞬間にパラダイスです、どこでも。どんなに泣いていても、どんなに行き詰まっても。行き詰まりはない。

あなた方は聞きながら、私が話すのと同じ、聞くも語るも同じ境地に入ってくださいよ。私は一人じゃべっているのではないんだ。みんなと一緒にしゃべっている。私は皆さんを代表して告白しているだけのなしです。

そういうときにはつきり聞こえてきます、本当に顧みの言葉が。そうしたら、俄然、力が出てくる。誰が理解しなくても、誰が忘れても、キリストはそういうときに近づいてくる。そして、キリスト一人が味方になったら、百万人以上の力だからね。本当ですよ。そ



れだけ生き生きとキリストを体験してくださいよ。私はもう、ちょっと異言が出そうになつて困るんだ。

だから、20章の今日やったところの一番大事な言葉は何かというと、この

「マリヤよ!」

なんです。そして、それに

「ラボニ!」

と答える。この二つの言葉。「先生!」と。「主よ!」でもいいよ、何でも。

だから、行き詰まりを知らない。この前言いましたね、

「墓が空であつた」

と。しかし、空な墓は実は聖霊が満ちていたんです、墓場の中は。甦つたキリストの霊が、完全にそこは聖霊の場になっていた。そのことをなお氣がつかないんだ、マグダラのマリヤも弟子たちも。それは本当に聖霊の降臨を受けるまではダメなんだ。我々の肉体は空気を吸って空気に包まれているが、我々の霊体は、魂は聖霊を呼吸している。聖霊の中に自分を投げ入れている。聖霊の空間に。だから、マリヤが喜んでしまっている。

17 イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。』

それはしがみつこうとしたんだよな、正直。いいよ、それで。少ししがみつかさせてやればよかったんだけどね。

「まだ天界に行かないから」

なんて。しがみついたら、マリヤはしびれてしまうね。キリストの霊的な生命だから。キリストは、

「お前は痺れて倒れるから、よせ」

というわけだ。

そういうように本当に具体的に一対一でもって、会話というよりも、なにか魂の、心の火花の散るような交わりが、我々の間になかったら、コイノニヤなんていったって、大したことないんだ。そして、会っているうちに自分がかたにか力を得る。お互いがキリストの生命をもつて、喜びをもつて、光をもつて、愛をもつて、助け合っていくということになりたいたいわけです。これが、「マリヤよ! ラボニ!」ということ。

我々がこの「ラボニ!」と言うときに、あるいは「主よ!」言うときに、叫んだと同時にキリストの中に入らなければダメです、ただ呼んでいるのでは。呼ぶことが同時に全身をもつてその中に自分を投ずること。祈りがそうでしょ。「主さま!」と言うときには、全身でもつて中に入る。祈り入らなくてはダメなんです。キリストが「マリヤよ!」と言うときには、もうマリヤは完全にキリストの中に入っているんです。キリストはもう包んでしまっているわけです。それなのに逃げたらしやうがないんだ、体裁をつくつたのでは。飛びつければいいんだよ。では、今日はそこまで。

